

早期子ども発達支援者研修プログラムの開発

——名古屋市の研修に関わって——

瀬野由衣*¹・山本理絵*²・三山 岳*³

2001年の「健やか親子21」では、母子への切れ目のない支援の重要性が強調された。それに続く2015年の「健やか親子21 第二次」では、すべての子どもが健やかに育つ社会の実現を目指し、「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」が加えられた。2000年代に入り、子育て支援のニーズは益々高くなり、国の施策や啓発運動に反映されてきたといえよう。しかしながら、近藤（2022）が指摘するように、未だ子どもの発達保障と子育て支援の体制は十分に整っているとは言い難い。とりわけ、障害の有無にかかわらず、全ての子どもに子どもとしての権利が保障されること、親子が安心して暮らすために母子保健から子育て支援の両者が繋がったうえで、障害のある子どもへの療育保障に繋がる仕組みが充実していくことが重要である。子育て支援を含む質の高い「早期子ども発達支援」体制を構築することが求められているのである。

このような状況の中で、「名古屋子ども発達支援体制のあり方に係る調査報告書」（2019）では、名古屋市の子ども早期発達支援の現状及び早期子ども発達支援を進めるうえでのニーズ分析が行われている。その結果、早期発達支援を巡る状況として大きく以下の二点が示された。第一は、発達障害の一般の人々への認知度が増し、早期子ども発達支援ニーズが全体として高まっている点である。具体的には、地域療育センターへの受診者が大きく増加しており、公私ともに保育所での発達障害児認定が増加している点が挙げられる。第二に、支援の対象となる「対象者（対象児）」の拡大である。調査の結果、就学前に子どもの発達に不安を感じる保護者が増大しており、子育て総合相談窓口の利用件数が増加していること、乳幼児健診にお

いても「要観察」となったケースが増加していることが示されている。これに関連して、2016年に名古屋市で実施された「子どもの育ちと保護者意識に関する調査」では、これまで主な支援の対象者として想定されていた、「療育や専門的な発達支援等を必要とする子どもとその保護者」（狭義のニーズ）に加えて、「発達に不安のある子ども及び子どもの発達に不安を感じる保護者」（広義のニーズ）が増大していることが示されている。推計では、狭義のニーズが12.6%であるのに対し、広義のニーズは27.9%であり、障害をもった子どもの支援という枠を拡大し、「何らかの支援が必要な子どもとその保護者」を包含する支援の必要性が高まっている現状がある。

発達支援の対象児と保護者が増大しているという事実は、支援者の側もより丁寧に子どもの発達をとらえ、発達状況や親子の置かれた環境を見極めることが必要になっていることを意味する。子どもと保護者を支えていくための知識や具体的なスキルを学び、蓄積していく場を整えることが喫緊の課題となっている。つまり、子どもの発達支援と保護者への子育て支援が一体となった「早期子ども発達支援体制の構築」が求められているのである。とりわけ、発達支援の中核を担う児童発達支援センターに加え、母子保健を担う保健センターと保育所や幼稚園の役割とその連携が重要となる。

こうした現状を受け、2020年度より愛知県立大学生涯発達研究所では、名古屋市子ども青少年局子育て支援部子ども福祉課との連携によって「早期子ども発達支援に携わる職員を対象とした研修プログラムの開発」を進めてきた。本稿では、療育施設、保健セン

ター、保育所、幼稚園の発達支援に携わる支援者が受講する子ども発達支援及び保護者支援に関する基礎的な研修プログラムの開発の流れとその概要を記したうえで、モデル実施を通してカリキュラムと実施方法を検証してきた内容を考察する。

1. 基礎講座の研修プログラム開発

(1) 研修ニーズの把握 (資料収集・インタビュー調査)

2020年度はまず、現行で行われている職員研修の実態把握を資料収集に基づいて行った。保育所、幼稚園、児童発達支援センター、保健センターの職員を対象とした研修の概要を収集した。これら現行の研修内容をふまえ、各部署での研修ニーズの実情を把握するために、児童発達支援センター、保健センター、公立保育所、公立幼稚園の代表者を対象にしたインタビュー調査を行った。各機関の研修ニーズは主に下記の通りであった。

【児童発達支援センター】

まず、主要な研修ニーズとして「子ども理解を深めること」の重要性が挙げられた。実践者が子どもと心地よい関係を作っていくためにも「子ども理解」が必須であり、子どもが何をしたいと思っているのか、その願いを含めて子どもを丸ごとで捉える視点が重要である。また、「子ども理解」が子どもについて保護者に語るための鍵になる。目の前の子どもを理解し、子どもの可愛いところを含めて伝えることが、保護者とのコミュニケーションにおいても重要になるからである。

また、療育では、発達の的には1歳半の節目を超えることが難しい子どもが多数おり、実際の生活年齢と発達年齢のずれが年齢の上昇と共に大きくなる。現場の職員には、定型発達の子どものみが在籍する保育所で、生活年齢に沿った生活づくりがどのように工夫され、組み立てられているのかという点について理解が深まると良いという話であった。これは、生活年齢を尊重した療育づくりにおいて重要になるからである。さらに、自分の職場以外の職員との交流を通して、「話して帰ることができる」という点も研修において重要であるとのことであった。

【保健センター】

保健センターでは、発達の基礎的理解に関するニーズが特に新任職員に大きいという話であった。現状の母子保健に関する研修では、発達に特化した研修は行われておらず、発達の見極めも含め、保健師は学習の

場を求めている。子どもの観察や発達検査のポイント、その意味についても知りたい。また、特に気づきの支援（保護者が子どもの発達に不安を感じ始めた段階の支援）、保護者への寄り添い方に関する理論や研究に裏打ちされた実践方法に関する研修ニーズもある。

【保育所】

現状では座学、実践記録の研究的研修、実習的な研修など多数の研修がある。要望としては、まず、子どもの発達について学ぶことができる研修へのニーズが強かった。その背景には、発達の見通しをもって子どもをみることができ保育士を育てたいという願がある。その際、単に「発達障害」か否かを判定したり、レッテルを貼るような知識ではなく、①発達の凸凹の見方、発達観、保育観の重要な部分をおさえることができる内容であること、②（たとえ発達に凸凹があったとしても）「こういう力、大事だよ」「こういう遊びでつながっていけるといいよね」という確認や発見ができる研修があると良いということであった。また、③発達が全体的に緩やかに進んでいる現代において、発達に遅れがある場合の知識や援助方法、あそびについて学べる研修ニーズも挙げられている。

地域療育センターとの連携に関しては、療育機関と保育所との違い、互いの良さと共に限界について学び合える研修の必要性が挙げられた。具体的には、療育センターの配置基準と保育所が大きく異なること、集団の規模が大きく、音への配慮ができない課題等、療育機関と「同じ」環境を保育園で作っていくことは非常に難しく、これらの違いを互いに共通認識しながら意見交換ができる場があると良いということであった。

【幼稚園】

幼稚園へのインタビュー調査では、まず、現状の加配制度枠がない状況での保育の厳しさが浮き彫りになり、制度的な支えと同時に、現場への支援の必要性が高いことがわかった。研修ニーズとしては、障害に関する基礎的知識を得られるような研修、幼稚園の保育者が療育現場に出向き、療育現場の職員が幼稚園での生活の現状を見てお互いに学びあえることの重要性も挙げられた。また、研修とは別に巡回相談の枠を拡大するなど、現場での困り感を手助けしていく支援ニーズが非常に高いことがわかった。

以上のインタビュー結果から、a) 座学での基礎的な講習に加えて、b) 療育現場職員が保育所に出向き、

保育園や幼稚園、保健センター職員が療育現場に向く、派遣実地研修及び交流を含む形態の研修が、現場のニーズを満たすものとして必要であることがわかった。

(2) 基礎講座開発プログラム内容

【座学】

発達についての基礎を学ぶ研修がいずれの機関においても十分でないことがわかった。特に、以下の点を含むことが必要であると考えられる。

- ・子ども理解の視点を含み込み、発達観や保育観について考えることができる内容
- ・発達の凹凸の見方だけでなく、発達の節目、特に療育現場では1歳半の節を超えることが難しい子どもが多数いることを考慮して、乳児期から1歳半の節にかけての発達を学ぶことができる内容
- ・障害をもった子どもの1歳半に至るまでの発達過程

【派遣実地研修】

- ・自分のいる現場とは異なる立場から、体験を通して子ども理解を深める。
- ・交流を通して、子ども理解、保護者支援の悩みや各々の工夫を共有し、語りあう。

2. 基礎講座モデル実施（第1回）の概要と評価

上記の内容を含む基礎講座を第1回から第3回までモデル実施することにより、プログラム案及び実施方法の検証を行った。

日程：令和3年度に3回実施（8月、2月、3月）

受講者：定員25名

対象：初任者、療育の基本を押さえた人（すべての回に参加できること）とし、児童発達支援センター職員、保育所保育士、幼稚園教諭、保健センター保健師を対象にした。なお、以下では、児童発達支援センターを省略して児発C、保健センターを保健Cと表記する。

まず、第1回の実施概要とその評価について述べる。

(1) 第1回基礎講座プログラム

第1回は、講義、見学実習、講義・ワークの3日間（同一受講者）で実施した。受講者は、療育センター・児発C職員10名、幼稚園教諭2名、保育所保育士5名（公立4名、民間1名）、保健C保健師2名、計19名であった。

【1日目：座学による講習（半日実施）】

概要：障害をもった子どもを念頭に置きつつ、「子ども」という存在をまるごと捉えるために大切な基本を

学ぶ。目の前にいる子どもを理解し、日々の生活やあそびでの工夫や困りごとを互いに学びあうことを目指した。

（午後）13:00～17:00

「発達とは何か？」について考え、乳児期から主に「1歳半の節」に至る発達の道筋について学ぶ。大人との愛着形成、三項関係の成立によって広がる子どもの世界と、こうした兆しがなかなか現れにくい障害をもった子どもを理解する視点と具体的な関わりについて考える。具体的な項目は以下の通りである。

- ・発達とは何か？
- ・乳児期前半の認知、社会性、身体一運動の発達（対追視、社会情動的交流、頸すわりから、仰向け姿勢の変化、機能連関）
- ・乳児期後半の認知、社会性、身体一運動面での発達（共同注意、愛着形成、三項関係、寝返りから座位、はいはい、つかまり立ちへ） ※映像視聴
- ・「1歳半の節」へ至る道筋と大人の関わり」（つもり（意図）をもった主体としての「ジブン」の成立、歩行、言語獲得、大人とのやりとりの質的变化）
- ・「新版K式発達検査」を通じてみる子ども理解
- ・障害をもった子どもと「1歳半の節」、保護者理解
- ・グループ交流
- ・各自の振り返り（振り返り用紙への記載）

【2日目：派遣実地研修（半日実施）】

概要：療育機関の職員は保育園に、保育園の職員は療育機関に1日見学実習に行くことで、普段、かかわることが少ない子どもたちの生活と保育環境について学ぶことを目的とした。児発C職員は、保育所で実施し、保育所、幼稚園、保健C保健師は、地域療育センターで実施した。

なお、事前に観察シートを作成、配布し、観察の視点を受講者に示した（内容：環境構成、各年齢の発達と基本的生活習慣の形成、子ども同士の関わり、保育者の働きかけ、集団での育ち）。また、観察後は、観察での気づきをまとめたシートに記載し、事後提出してもらった。

（午前）9:00：観察・体験学習

- ・朝の会
- ・自由あそび
- ・設定保育
- ・給食

11:30：質問タイム

12:00～13:00：終了

※見学先によって、時間は前後して実施した。

【3日目：派遣実地研修の反省、あそびと保育環境づくり】

概要：子どもの権利条約に照らしながら、療育の基本について改めて考える講義を加え、派遣実地研修での学びを振り返り、共有した。そのうえで、各療育機関の療育の方針、それに基づく年間カリキュラムや月案などを持ち寄り、あそび（ねらい）や環境構成で工夫していること、季節ごとの工夫、母親との関係づくりや困っていることについて交流形式で学びあった。

（午前）10:00～12:00

各実習先で見学・体験した、子ども及び子ども集団の様子、発達に応じた保育環境や保育者の働きかけについて、疑問や感想を出し合い、学びあった。

（午後）13:00～17:00

①座学：子どもの権利条約と療育の基本（名古屋市の指針）

〈内容〉名古屋市の「子どもに関する総合計画」や「なごや子どもの権利条例」を引用しながら、令和元年に市が示した「今後の名古屋市早期子ども発達支援体制に関する方針」の基本的な考え方を確認し、その内容と関連付けながら子どもの権利条約の第2条、第3条、第6条、第12条、第23条について解説した。また人権の意識が希薄な場合に療育で起こりやすい課題について考えた。

②受講者同士の交流

（テーマ1）各施設の療育の方針、あそび（ねらい）、環境づくり、季節ごとの工夫の交流

（テーマ2）保護者との関わりにおける悩みや工夫

③各自の振り返り（振り返り用紙への記載）

なお、講座3日目の振り返りで、日頃関わっている【子ども】と【保護者】への関わりや支援に関して挙げられた受講者自身の課題（ねらいや大切にしたい働きかけ）について、1か月後にどのように変化したか、また、今後の目標について、振り返りシートを提出してもらい、この内容を、研修の効果を評価する資料とした。

（2）第1回プログラム評価

【1日目の座学の評価】

〈受講者の振り返りシートより〉

第1回プログラムの1日目（8月実施）の受講者の振り返りシートから、講義の内容で印象に残った事柄、講義を聞いて得られた「子どもとの関わりや発達支援に関する気づき」に関するキーワードについて主

に検討した結果、以下のことがわかった。

表1 所属施設別にみた講義の内容で特に印象に残った事柄

	児発 C	幼稚園	保育 所	保健 C	計
① 発達について	1	1	1		3
② 乳児期の発達	2		2	1	5
③ 1歳半の節	3		2	1	6
④ 障害を持った子どもと1歳半の節	2	1	1	1	5
⑤ ①～④全体	2				2

※講義の内容①～④について印象に残ったもの（⑤はあえて「全体」と回答した受講者の数）

※①～④について複数をあげた受講者がいるため、合計は受講者数と一致しない

表1からわかるように、所属施設によって印象に残った講義内容が異なるという傾向はみられず、①から④にかけて均等に分散していた。また、振り返りシートから、講義を受けて受講者が気づいたこと（学んだ事柄）のキーワードとしては、表2に示す内容が挙げられた。主に、「子どもの発達」の見方や考え方に関する気づき、子どもに関わる支援者（保育者）に必要な知識、保護者支援に関する内容である。いずれの内容も相互に関連しており、「子ども理解」（子どもを知ること、発達の視点から理解すること）が子どもへの支援のみならず、保護者との信頼関係につながることで受講者に伝わる内容になっていたと思われる。実際に、講義を受けて、「子どもを理解する視点を再確認する」と同時に、「子ども理解に関する新たな視

表2 講義を受けて受講者が挙げた「気づき」のキーワード

子どもの発達について	ヨコの発達 三項関係、1歳半の節 意味を感じていることに向かって世界に働きかける力
支援者の求められる資質について	子どもへの共感 人と関わる心地よさ できる・できないに囚われず、子どもをよく見る（見るための視点） その子に合った対応をするための理解力 間をもたせる関わり方、環境のつくり方 子どもの行動の本質理解（そのための発達についての深い知識）
保護者支援との関わりについて	子どもを知ることが母の信頼につながる 子どもの姿を捉え合いながら関係をつくっていく

点を得ることができた」という感想が寄せられている。

〈講義実施担当者による評価〉

第1回の受講者アンケート（振り返りシート）の結果、講義実施者が想定していた「ねらい」は、ある程度達成されていたと思われる。一方で、表1の①～④の内容をより丁寧に解説するには、半日ではなく1日（午前・午後）実施が適切であると思われた。今回は映像を部分的に取り入れ、実際に10ヶ月児の姿を見て考える時間を設けたが、より多くの映像を取り入れて講義を進めた方が受講者の理解度も増すことが期待される。また、第1回は「障害を持った子どもと1歳半の節」において、実践事例の概要紹介に留まったが、実際に実践事例を読んで各自で考え、グループ交流を行うなど、意見交換の場を作ることも有意義であると思われる。第2回実施、第3回実施で新たに取り入れ、継続課題としたい。

【2日目 派遣実地研修の評価】

派遣実地研修の振り返り（3日目午前のグループワーク）として受講者が挙げた気づきを表3と表4に示した。それぞれの違いに気づくと同時にグループ交流で得た学びも大きいことがわかった。

表3 保育所見学実習での気づき

	保育所見学実習で気づいたこと
生活	<ul style="list-style-type: none"> ・玩具が見える場所にあり自由に選んでいる ・1歳児が自分で着脱しようとする姿、シャワーを期待して待っている姿に驚いた ・子ども同士、保育者との関わりが意識できている ・暗黙のルールが守られている ・生活の流れを理解できており、区切りが明確でなくても自分で活動を終えている
あそび	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちだけであそびを発展させていける ・友達を真似して関わったり遊んだりする、友達を意識する姿 ・5歳児は保育士の替わりの役割ができる ・支援が必要な子ども完全に保育者が付かなくても、友達を励みに頑張ることができる ・保育者の声かけや友達との話から体験の絵を描きあげることができる ・4歳児では男女の違いがみられた、リズムを2グループに分かれて見て待つことができる
支援者	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者は一息つく暇もなく忙しい ・お互いの生活を知ることが大切

表4 療育施設見学実習での気づき

	療育施設見学実習で気づいたこと
生活	<ul style="list-style-type: none"> ・環境（玩具等を目隠しする、椅子の大きさ、マーク、視覚支援等）の配慮→一部保育園でも参考にできる ・同じことを繰り返して身に付けていく ・ことばの代弁、援助の違い ・少人数でのよさ、個別の支援の丁寧さ ・偏食もできるだけなくしていく工夫、個々に合わせた形状や取り皿 ・「おしまい」や時計からの音、絵カードなどの区切りになる物があると切り替えられる ・個々の特性から時間・流れを決めている ・家庭での出来事をひきずっていた子の話を丁寧に聞いて受けとめていた
あそび	<ul style="list-style-type: none"> ・好きな遊びをしているが、個々であったり先生と一緒にだった ・子どもから先生への要求が少ない（反応の違い） ・同じ動きができる子が少ない（興味の有無） ・興味をもったタイミングで活動を促す ・言葉が出ない分、痲癩など身体で表現している ・視線の先にある物に行ってしまう ・粗大運動を促す遊び ・先生が子どもと子どもの間に入って代弁してつないだり、友達を意識させる工夫をしている ・集団を意識できるクラスでは、先生も一緒に全員が楽しんでいた
支援者	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡ノートをしっかり書いて、保護者と連携している ・職員同士の協力がうまくできている ・センターと連携していきたい ・保護者への伝え方や配慮を学びたい

【3日目（午後） 受講者同士のグループ交流の結果】
 （テーマ1）各施設で、大切にしていること、年間を通してのねらいの変化、療育・保育計画の立て方等について、療育施設に所属する受講者が説明し、質問を出し合った。療育施設では、とくに前期は同じ日課や1週間同じあそびを繰り返すなど、慣れて安心できるように工夫している。おやつは3種類の中から選ぶようにしたり、ほしいことの表現を促したりしている。個々人の自由あそびでは、出した道具でどのように遊ぶか、子どもの興味関心を確認し、集団でのあそびでは、友達を意識できるように工夫していることなどが交流された。難聴の子どもの支援方法、行事や保護者参観・親子登園、懇談会、月案に家庭へのメッセージも付けて掲示・配付するなどの工夫についても情報交

換された。療育施設では、クラス担任が3人いるからこそ、週案の振り返りや個別支援が丁寧にできるという良さが語られた。

(テーマ2) 保護者との関わりにおける悩みや工夫について交流した。幼稚園・保育所における発達がゆっくりな子どもの保護者や不安や負担が大きい保護者との関わり方、療育と同じように園でもやってほしいと要求されたときの難しさや悩みが交流された。保護者の話をじっくり聴き心配に寄り添うことの大事さ、保護者が困り感を持っている時が相談のタイミングであること、障害受容には時間がかかるので長い目でみていくことの必要性などが話された。

療育施設では、幼稚園・保育所への移行の際の保護者との関わりについて、見学に行って体験してきてもらったり、これまでどう育ててきてどのステップにいるか、事実・情報を判断材料として伝えること、保育士以外のケースワーカー、OT、PT等からも話をしてもらい、転園・退園した保護者の集まりなどの保護者同士の力を借りること、最終的には保護者が理解して納得して決めることが大事、などの意見が交わされた。また、親子関係への援助やきょうだいへの支援、我が子だけでなく、他の子どもにも関心をもってもらい親の集団づくりをしていく際の悩みや工夫についても話された。外国人や医療的ケア児についての課題も出された。

また、保健Cでの健診時の保護者への伝え方の難しさや児発Cとの連携についても交流された。

【研修実施1ヶ月後の受講者自身の振り返り】

講座日3日目の振り返りで、日頃関わっている【子ども】と【保護者】への関わりや支援に関して挙げた受講者自身の課題（ねらいや大切にしたい働きかけ）について、1か月後にどのように変化したか、また、今後の目標について記載した振り返りシートの内容を分析した。以下、代表的な感想及び受講者が示した課題について述べる。

表5、表6は、所属機関別に、子どもとの関わり、もしくは保護者との関わりにおいて、自身の課題について意識した結果、うまくいったこと（手応えがあり、うまくいったと思われること）に関する気づきをまとめたものである。

表5 子どもとの関わりにおける気づき

	子どもとの関わり
児発C	<ul style="list-style-type: none"> ・いつも以上に、保育者を求める姿が増えたと思う。また、人を意識したり、人の動きを目で追っていることも増えた。発達を学び直すことでの、子ども個々に合わせた関わり方もできるようになった。 ・日々繰り返す中で、最初は板ブランコや大きなすべり台を怖がっていた子がいろいろな遊びを楽しめるようになってきた。 ・保育者との1対1の関わりだけでなく、一人ひとりがお友だちや人への興味が広がってきていると感じている。保育者が間に入りながらお友だち同士をつなげることを、引き続き大切にしていきたい。 ・子どもに、動きや活動の内容を詳しく伝えたことによって、子どもの表情が安心しているように感じるが増えたと思う。 ・ここはまだできない、ダメだろうと保育者が決めるのではなく、子どもの可能性。ダメかもと思っていたことがやってみたい！のチャレンジする姿がみられた。
保育所・幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・センターでは「来てくれただけで100点！」と子どもにも保護者にも対応しているという話を伺い、定型発達の子にも認めてあげることが大切だと思い、登園拒否の子ども数人にお迎えの際に対応した。すぐに教室に行くことが難しくても、保護者と離れ、私との時間を楽しむ姿が増え、その子に対して適切な対応としてよかったのかなと感じた。 ・支援のいる子がクラス以外の部屋（エリア支援の部屋、保健室）に来た時の様子や、よく遊んでいるおもちゃを担当に伝え、クラスでも遊べるようにしてはどうかと提案した。それを担任が取り入れ、支援のいる子が落ち着いて遊べる環境を考えてくれた。また、支援のいる子だけでなく周りの子どもたちの遊ぶ環境作りの一つになったと思う。 ・今まで車の玩具が数個しかなかったため、取り合いになることが多かったが、同じ種類で数を多めに出すことで子どもたちが選り、それぞれ気に入ったもので満足するまで遊ぶ時間が増えた。 ・丁寧な関わりをすることでその子自身が笑顔になったり、相手の子が「どうぞ」とおもちゃを渡してくれたりなど、その子自身の関わり方の成長と周りの子との関係づくりに繋がっていったと感じた。

保健C	<ul style="list-style-type: none"> ・その日の様子のうち、自分の観察したいポイント以上に児の興味のあることをよく見て親と話すことで、親から普段の様子や今日との違いなどがより具体的に語られた。 ・視覚優位で言葉がけをしてもなかなか指示が入らない児に対して、おもちゃをしまうことを目の前で見せ、短くて分かりやすい言葉がけをすることで実際に真似をして片付けが出来た児がいた。
-----	---

表6 保護者との関わりにおける気づき

	保護者との関わり
児発C	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳の記載を見て更に質問をしたり、話を広げられるように意識して会話をした。質問した話題から、他の保護者と繋がれる話題に発展していったケースがあり、保護者同士情報交換するきっかけとなれたことがあり嬉しかった。バスの添乗時では、様々な話題でお話しすることで、更に子どもや保護者の方の事を深く知るきっかけとなった。保護者とのやり取りに苦手意識があったが、何気ない話をする事で私自身もリラックスしてお話ができて会話を楽しめるようになってきた。 ・子どもを積極的に褒めるようになってから、「私も、この子の〇〇のところが良いなと思っている。」「そういえば少し前はこれが出来ていなかった。いつの間にか成長していたのね。」など、保護者からの率直な思いを言うことが増えたように感じる。子どもの味方の先生だとより安心感を持って頂けたり、こちらが硬い話だけではなく世間話もしたりすることで、保護者がその時々で思っていることをそのまま言って下さるようになったのかなと思った。 ・以前よりも保護者とのコミュニケーションに緊張しなくなった。また、話すネタを探すうちに子どもの細かい行動にまで意識がいくようになった。 ・毎日直接話せる機会のある親御さんとは、素敵な姿や嬉しかった姿をその日のうちに共有することができている。こちらの想いを伝えるだけでなく親御さんの困りや想いを聴くことも大切だと思っている。親御さんと同じように共感できる時はとても嬉しいなと思う。

保育所・幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ母親という立場から共感できる事項を話したり保護者を労う言葉をかけたりすることで、保護者の方も話し始めてくれた。 ・なるべく会えた時は直接口頭で子どものその日の様子を伝えるようにしてきたことで、保護者も家での様子を自ら話しやすい雰囲気につながったのではないかと思う。 ・1か月の間に行ったサロンの回数が2回程度のため関係づくりをしている最中ですが、エリア支援担当職員3人が連携して声をかけたことで、保護者の方は色々抱え込んでいた気持ちを吐露できた様子でした。相談に対する回答だけが支援とは限らず、話を聞くことで保護者が落ち着くことができたり、自分の気持ちを整理することができるとも重要な支援だと感じた。 ・「〇〇せんせい」と保育者が伝えると、真似して言うてくれたことを話すとお家でも「〇〇せんせい」と教えてくれたりした。
保健C	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の先入観や勝手な解釈を入れずに、話を聞くことができた。 ・乳幼児健康診査で言葉の遅れや行動面の心配があり発達のフォローが必要な児の保護者に対して、丁寧な説明・関わりを意識することで保健師の継続支援の受け止めに対して了承して下さる方が多くなったかなと感じた。

表5、表6にあるように、研修終了後、1ヶ月の間に研修での学びを通しての自身の課題を明確にし、子どもや保護者との関わりにおいて新たな気づきや手応えを得ることができた、という感想が多数寄せられた。

【第1回プログラムの全体評価】

第1回は講義（座学）、見学実習、座学+交流という3日間のスケジュールで行われた。3日間の研修を通して受講者が得た「子どもや発達についての気づき」は、主に以下の三点に集約される。第一は、「障害の有無にかかわらず、すべての子どもにとって普遍的な支援者に求められる視点の再認識」である。第二は、「児童発達支援センターと幼稚園・保育所の相互理解の重要性」である。第三は連携に関わるものであり、「児童発達支援センターと幼稚園・保育所相互理解の重要性」と「児童発達支援センターと幼稚園・保育所の相互理解の重要性」である。それぞれの具体的な内容は以下の通りである。

★ 障害の有無にかかわらず、すべての子どもにとって普遍的な支援者に求められる視点の再認識

- ・できるできないではなく、取り組む気持ち、やりたい気持ちを大切に
- ・子どもにとっての意味の尊重
- ・成長・発達はそれぞれであることの尊重
- ・子どもをしっかり観ることの大切さ（そのためには適切な知識に基づく視点が重要）

★ 児童発達支援センターと幼稚園・保育所の相互理解の重要性

- ・施設の目的や職員配置基準から児発Cではできることが、園では課題になることがあることの認識の大切さ
- ・保育所の保育における、集団の中での個の重要性の再確認

★ 「園での子どもへの関わり方」と「児発Cでの子どもへの関わり方」を融合させることの重要性

園の特徴	児発Cの特徴
集団に軸足を置く 新しい体験を多く取り入れる	個に軸足を置く ひとつひとつの体験を丁寧に行う

施設の目的や職員配置基準から施設の特徴はあるものの、子どもの発達やそのための支援に変わりがあるわけではない。

続いて、三日間を通じて学んだ保護者支援の気づきを、アンケートの自由記述を基にまとめたものが図1となる。

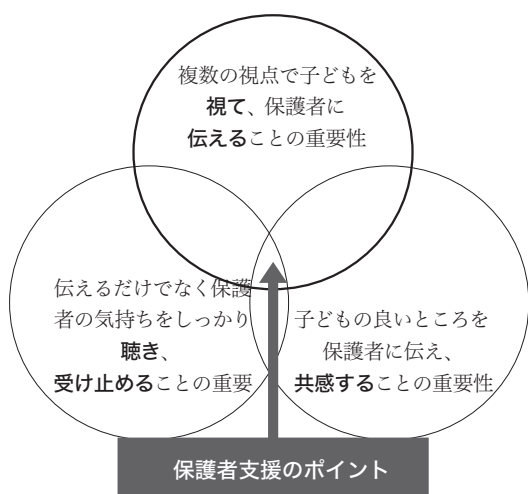


図1 受講者が得た「保護者支援の気づき」

最後に、3日間の研修に参加して良かったと感じたことのキーワードを、受講者の感想の自由記述からまとめると下記のようなになる。特に、保育所保育士、保健師は療育施設の見学、療育施設の職員は保育所の見学実習に行き、交流（意見交換）することで、それぞれの職場の実情がわかると同時に、所属施設との違いや共通点、「違いながらも共通する悩み」について共有することが可能になったと思われる。「子ども理解」の基本軸を共有したうえで、異なる施設の職員が「お互いについて知る」ことが、子ども本人、そして保護者支援にもつながる重要な取り組みであることが、受講者のアンケート結果からも確認できたと思われる。

★ 研修に参加して良かったと感じたことのキーワード

- ・他の施設、職種の人のお話を聞くことができたこと
- ・それぞれの職場の大変さを感じられたこと
- ・それぞれの職場の違いを知ることができたこと
- ・他職種の人と悩みを共有できたこと
- ・他の施設の保護者対応についての考え方を知ることができたこと
- ・他の施設を見ることができたこと

以上の第1回の基礎講座の評価結果をふまえ、以下では、第2回、第3回のプログラム及び改善点について述べる。

3. 基礎講座モデル実施（第2回、第3回）の概要と評価

(1) 第2回、第3回基礎講座プログラム

第1回の評価をふまえ、第2回、第3回プログラムでは、座学を午前、午後を含む一日実施とし、より多く映像を取り入れて具体的に発達的な理解を促す工夫を加えること、また、生活や遊びを通して発達を援助する視点を身近に感じてもらうため、「実践で大切にしたい発達の視点」の事例検討を通して考える時間を新たに設けた。具体的には、「みんなのねがい 2021年4月号 山本翔太さんの実践記録」を追加資料とし、各自内容を読んで自身の実践と照らして考え、感想を交流する時間を加えた。

なお、第2回、第3回は、対象者は異なるが、同一内容の座学講義を実施したため、以下での実施の評価は第2回、第3回の受講者の感想を合算したものを用的こととする。

〈受講者の概要〉

第2回の受講者は、療育センター・児発C職員4

名、保健C保健師4名、その他（北部移管法人）4名、計11名であった。第3回の受講者は、療育センター・児発C職員8名、幼稚園教諭2名、その他（北部移管法人）8名、計18名であった。2回分を合計すると、療育センター・児発C職員12名、幼稚園教諭2名、保健C保健師4名、その他12名、計29名の受講者であった。

(2) 第2回、第3回プログラム評価

〈受講者の振り返りシートより〉

第2回と第3回の受講者の振り返りシートから、講義の内容で印象に残った事柄、講義を聞いて得られた「子どもとの関わりや発達支援に関する気づき」に関するキーワードについて主に検討した結果、以下のことがわかった。表7のように、③生後10ヶ月の発達と1歳半の節、④障害を持った子どもと1歳半の節についてが、より興味深かったようである。これは、受講者の所属の違いにもよるが、講義の組み立てを修正したことによるものと考えられる。

表7 所属施設別にみた講義の内容で特に印象に残った事柄（第2・3回）

	児発C	幼稚園	保健C	その他	計
① 発達について	3			1	4
② 乳児期の発達			2		2
③ 生後10ヶ月の発達と1歳半の節	5		4	9	18
④ 障害を持った子どもと1歳半の節	4	2	1	5	12
⑤ ①～④全体	1		1	1	3

※講義の内容①～④について印象に残ったもの（⑤はあえて「全体」と回答した受講者の数）

※①～④について複数あげた受講者がいるため合計は29にならない

講義を受けて受講者が気づいたこと（学んだ事柄）は、振り返りシートに記載されたキーワードとして、表8に示す内容が挙げられた。第1回研修1日目の結果と同様に、主に、「子どもの発達」の見方や考え方に関する気づき、子どもに関わる支援者（保育者）に必要な知識、保護者支援に関する内容である。いずれの内容も相互に関連しているが、新たに加わった項目をみると、子どもの興味・関心ややりたいことに目を向け、支援者も一緒に楽しむことを大事にする視点を学んでいただいたと思われる。また、保護者や他機関・他施設の交流や情報共有についても、より多くの気づきが挙げられた。

表8 講義を受けて受講者が挙げた「気づき」のキーワード

子どもの発達について	ヨコの発達 1歳半の節
支援者の求められる資質について	できる・できないに囚われず、その子なりの成長をみる 型にあてはめず、広い視野で柔軟な枠で子どもを見る 子どもへの情動的共感 楽しさの共有 子どもをよく見る・知ろうとする（見るための視点） 子どものサインを見逃さない その子に合った対応をするための理解力 子どもの行動の本質理解（そのための発達についての深い知識） 間をもった関わり その子が興味を持った事や、思いに目を向ける その子にとってわかりやすい関わり
保護者支援との関わりについて	親御さんも、その子の成長に目を向けられるように声をかける 小さな気づきを職員同士、保護者と共有し、共感していく 他の施設との交流 他の支援者や保護者と情報を共有・把握

（下線は、第1回講座の振り返りになかった項目）

〈プログラムの評価と今後の課題〉

第1回（8月）から、第2回、第3回（2月、3月）の基礎講座（座学）で変更を加えた点は、以下の三点である。第一は、「発達とは何か」の内容をより膨らませ、「一人ひとりの能力ではなく『テーマ』をみる視点」を加えた点である。第二は、一人の子どもの発達が時系列的に伝わりやすくなるように、生後6ヶ月、10ヶ月、1歳半の姿を捉えた映像を講義資料に加えたことである。最後に、第三として、実践記録を実際に読んで自分の考え、学びを記述する時間を設けて、全体に向けて一人ひとりが発表する時間を作った点である。当初は、グループに分かれてグループ内で振り返りの時間を設ける予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、グループワークは中止し、各自の学び、感想を発表する機会を設けた。

受講者の振り返りシートをみると、特に「障害をもった子どもと1歳半の節」が各自の実践の中での子どもの姿と重なる部分が多く、印象深かったようである。今回の研修では、「1歳半の節にかかわるテーマ」を、4つの側面から取り上げた。「定型発達における

1歳半の節」では、乳児期前半の成長をふまえる形で1歳半児の映像を視聴した。「1歳半健診場面」では、こうした姿が乳幼児健診場面でどのように現れるのかを確認し、発達を捉えるうえで大切な視点を共有した。これらをふまえて、「障害をもった子どもが1歳半の節を超えることの難しさ」について学び、「療育場面の中での実践、保護者と療育関係者が連携し、成長を共有する姿」を実践記録を読みながら考えた。これらを通して、発達が乳児期からの積み重ねの中で展開していくこと、一人ひとりの姿に寄り添い、そこに情動的な共感を通して関わっていく大人の関わり方の大切さを改めて実感したという感想が寄せられている。

また、受講者からは、「映像や写真も多く、具体的に子どもの姿を見ながら課題を考えることができ、大変わかりやすく、また自分のみでいる子どもたちのことを想像しながら考えることができました。」「エピソードも多く自分が日々と関わっているお子さんのことに関わる内容だったので、とても考えやすくわかりやすかったです。」「気づきの共有、意見交換もとてもよい刺激と視点をもらえました。」などの感想が寄せられた。写真や映像、実践記録を織り交ぜながら1歳半の節について考える機会を設定することで、「目の前にいる子ども」「これから向き合うことになるであろう子ども」の姿を具体的にイメージしながら考えることが可能になったと思われる。映像視聴や感想の交流、意見交換は好評であり、今後も、お互いの感想を伝えあう機会を大事にしながら基礎講座の内容をさらに発展させていく必要がある。

4. モデル実施全体を通じた評価とプログラム改良提案

(1) 基礎研修プログラム案の検証と改善点

基礎研修のプログラム案は、児発C職員のみではなく、保育所保育士、幼稚園教諭、保健C保健師等、「早期子ども発達支援」に関わる関連機関の多職種の職員が参加することが特徴の一つである。研修内容は、発達および療育の基本に関する講義（交流を含む）、療育・保育現場での派遣実地研修、実地研修の振り返りによるグループワークから構成され、受講者の主体的参加と振り返りを大事にしている。

座学の講義については、日常の業務で子どもと関わる中での「悩みや疑問に思うことへ新しい視点」や「当たり前になっていたことの意味の再認識」など多くの気づきを得られた様子である。特に「発達とは何か」（発達を捉える視点）や「障害をもった子どもと

1歳半の節」の内容は、第2回、第3回の講義において内容理解が深まるように工夫した。映像視聴や事例検討、各自の気づきの発表を加えることで、目の前にいる子どもの姿と結びつけて考えることができたという感想が多数寄せられている。

第1回プログラムの2日目でモデル実施した見学・グループワークでは、日頃、従事する仕事とは別の施設での子どもの様子や支援者の関わり方を見学し、別の施設で働く職員との日頃の様子や報告、悩み等の話し合いを行った。その結果、子どもを見る視点や保育観への気づきを得られたことが窺われる。児発Cのスタッフにとっては、児発Cでの支援の中に「園で行われているような集団の視点」を取り入れることに新たに意識が向いたことが交流の中でも確認された。また、「支援している子どもが園で生活する様子をイメージすること」で「子どもへの支援や保護者への相談・助言についての新たな気づき」を得られたようである。保育園職員にとっては、児発Cでの支援者の子どもへの関わりや視点が園での定型発達児への関わりや発達を見る視点においても大切であることに改めて気づいたり、集団保育の中でも一人ひとりの個をしっかり見ることの大切さを改めて感じたようである。また、保健C保健師にとっては、講義や児発Cの見学や受講者との交流を通して、乳幼児健診の場などで子どもを見る視点について再認識することができ、支援の必要な子どもを療育現場へつなげる際により丁寧な情報提供や助言ができると感じたことが窺われる。

目的や職員配置等の環境がまったく異なる施設を見学し、職員同士交流することで、受講者が子どもを見る多様な視点の重要性に気付くことが期待できると思われる。このように支援者が多様な視点を意識することで、子どもに対する見方、支援の手法がより良いものになることが期待できるであろう。

さらに、保護者支援については、所属施設にかかわらず、どこで働く職員も一様に保護者との関わり方に悩んでいることが共有できた。立場の違いを超えた悩みの共有により、「悩んでいるのは自分だけではない」と感じることができ、また、違う立場の職員の関わり方等を聞くことにより、これまでにない学びが得られたと思われる。アンケートにおいても「保護者の気持ちを受けとめること」や「子どものいいところを共有する大切さ」に改めて気付いたという感想が多く寄せられている。

以上のような成果がモデル研修では認められたが、

第1回プログラムで実施したように一人の受講者が3日間の参加を要する研修は、勤務上、難しいことも予想される。また、発達に関する講義は、勤務1年目の職員も受講可能であるのに対して、見学及びそれに基づくグループワークは、ある程度自分の働く施設について体験的に理解できてから参加したほうが、学びが深まると考えられる。

以上より、第1回プログラムで実施したモデル研修の1日目（座学）と2・3日目（派遣実地研修及びグループワーク）を切り離して、別研修として実施するプログラムが提案できる。その際、モデル実施の第2回、第3回で実施したように、発達に関する講義は半日から1日研修に拡充し、「発達とは何か」の内容を充実させるとともに、一人の子どもの発達が時系列的にイメージをもって伝わりやすくするために、生後6ヶ月、10ヶ月、1歳半の姿を捉えた映像を講義資料に加え、さらに、実践記録を読んで総合的に考察し、グループ討論等の交流ができる時間を設けることが効果的だといえる。また、実地研修（見学）については、事前に観察の視点などについて、受講者に一定の確認をする必要があるだろう。交流の際も、保護者支援の時間枠を拡大するなど、受講者のニーズに合った内容を工夫することも検討課題である。

なお、研修受講者定員については、1回の講義に関しては50名まで、実地研修（見学）及びグループワークは25名までが適当であると考えられる。

(2) 早期子ども発達支援と子育て支援の一体的実施の促進：基礎研修プログラムの意義

モデル研修の実施、評価を踏まえて、早期子ども発達支援と子ども・子育て支援の一体的実施を進めるためには、以下の三点が重要であると考えられる。

第一に、児発Cの職員と園の職員、保健C保健師が各々の施設、立場についてよく理解し、子どもにとっての各施設の意味を理解することが必要であると思われる。

第二に、それを踏まえ、子どもに発達の遅れが有っても無くても「子どもを見る視点」として必要な事柄は変わらないとの視点に立ち、各々の施設で一人ひとりの子どもを尊重した支援を行い、適切に連携していくことが重要だと考えられる。

第三に、早期子ども発達支援においても、子育て支援においても、保護者との関わり・保護者支援は欠かせない要素であり、立場による内容の違いはあるものの、共通する基本的な姿勢をまず身に付けていく必要

がある。

3日間の研修の受講者による振り返りからも確認できたように、本研修では、「子ども観」や「子ども理解」の基本軸を共有したうえで、それぞれの職場の実情を知り、所属施設との違いや共通点、「違いながらも共通する悩み」について共有することができたといえる。また、お互いに学び合い、それぞれの施設での工夫や配慮をできる範囲で取り入れようとする姿勢が見られた。そして、これらの学びは、子ども本人の支援だけではなく、保護者支援にも生かされるものであることが確認できた。

また、気づきの支援の観点では、地域療育センターや保育所・幼稚園における役割も大きいのが、乳幼児健診に直接立ち会う保健C保健師の役割は特に重要であると思われる。保健師が児発Cと園の特徴をよく理解し、子どもの発達の現状を見極めた上で、その子に合った支援の道筋を考え、つないでいくことが大切であると考えられる。その意味では、本研修に保健C保健師が参加している意義は大きいといえよう。

子どもの発達支援、保護者への支援は、決してマニュアル的な手法で進めていけるものではなく、極めて専門性の高いものである。発達支援に関わる専門職が多様な視点で子どもの発達をとらえ、子どもにとって適切な支援のあり方を考えること、そして、保護者の状況に応じて適切な支援の利用方法を提案、助言していくことが重要であると考えられる。児発C、園、保健Cが子どもの支援の方向性についても必要に応じて相談できる等、柔軟に連携しながら、各々の施設の特徴を生かして支援していくことが望まれる。

このような環境を作っていくためには、児発C、園、保健Cの職員が子どもの発達についての正しい知識を持ち、各施設の実情やその役割についての理解に基づいて連携していくことが重要であり、異なる種別の施設の職員の参加を得て、早期子ども発達支援担当職員研修を継続的、段階的に実施していくことは大変意義があると考えられる。今後、進めていく早期子ども発達支援担当職員モデル研修の中級・上級においても、児発C、園、保健Cの職員が交流しながら多様な視点から学び合えるよう、研修プログラム案を精緻化し実施していくことが課題である。

注

*1 愛知県立大学教育福祉学部准教授 *2 愛知県立大学教育福祉学部教授 *3 愛知県立大学教育福祉学部准教授

引用・参考文献

- 早期子ども発達支援担当職員モデル研修報告書 (2022) 愛知県立大学生涯発達研究所
- 子どもの育ちと保護者意識に関する調査 (2016) 名古屋市子ども青少年局
- 子ども発達支援に関する調査報告書 (2018) 名古屋市子ども青少年局
- 近藤直子 (2022) 障害の早期発見・早期対応、子育て支援における発達保障 障害者問題研究, 50(2), pp. 2-9.
- 今後の名古屋市早期子ども発達支援体制に関する報告書 (2020) 名古屋市子ども青少年局
- 名古屋市子ども発達支援体制のあり方に係る調査報告書 (2019) 愛知県立大学生涯発達研究所 (監修)
- 山本翔太 (2021) 自分づくりを豊かにする発達の視点 みんなのねがい 全国障害者問題研究会, 4月号(662), pp. 16-17.

付記

本研修プログラム開発研究は、愛知県立大学生涯発達研究所が名古屋市からの以下の業務を受託したことに伴うものである。関係の皆様には感謝いたします。

- ・「名古屋市子どもの発達支援体制のあり方に係る調査監修業務」2018年10月～2019年3月
- ・「早期子ども発達支援担当職員の体系的研修実施に係るプログラム作成業務」2020年4月～2021年3月
- ・「早期子ども発達支援担当職員向け研修のモデル実施業務」2021年6月～2022年3月

本稿は、筆者らが作成した『早期子ども発達支援担当職員モデル研修報告書』の一部を抜粋し加筆修正したものである。